

## 第十章 九月十日 有力実業家の善後会準備

内務大臣後藤新平から協調会渋沢栄一への依頼に始まった震災救済機構の設立は、東京商業会議所を拠点とし、貴衆両院との連携によって、九日の協議会において大震災善後会として構想が確立した。内務省の要請を受けた四日より相談に応じた同会議所の幹部に、独自の支援を始めた実業組合連合会の正副会長が加わり、渋沢に協力して十一日の正式発足へと万全の準備が進められる。

### 白石喜太郎の手記

◇九月十日

午前九時三十分頃出勤、依例白石随行〔中略〕内務大臣官邸二到り、塚本次官及池田長官二対シ昨日協議並二進展ノ模様ヲ詳細説明シ、尚大臣ニ伝言ヲ依頼シテ之ヲ辞シ〔中略〕東京商業会議所二赴キ、山科・杉原・服部・星野・阿部諸氏ト会見、明日開会ノ第一回委員会ニ付種々打合ハセ ①

① 白石喜太郎「手記」『渋沢栄一伝記資料』第三一巻、三二九頁。

会議所では会頭藤山雷太は四月以降外遊中であつたが、副会頭の山科礼蔵が代理を務め、同じく副会頭の杉原栄三郎と理事服部文四郎がこれを補佐した。山科は築港や架橋の係わる海事工業所を設立し、杉原は大陸への貿易や軍需品の調達を扱う杉原商会の社長である。また、実業組合連合会の星野は東京印刷、阿部は東京瓦斯コープスのそれぞれ社長であつた。早稲田大学教授たる服部は金融論の専門家として商業会議所に参与していた。

これら実業家等の活躍や周囲の支援については好個の挿話が、『東京商業会議所報』に記載される。すなわち大震災に先立つ半年前、海外出張を果たした複数の帰朝者に会議所主催の歓迎会が企画された。この午餐会には山科礼蔵、阿部五郎、星野錫等が主賓として招かれ、河井貴族院書記官長や井上日銀総裁、報道関係者など百余名が列席した。

### 財界諸氏帰朝歓迎会（『東京商業会議所報』）

大正十二年二月二十七日正午、丸の内東京会館に於て、今回帰朝せられたる南米視察実業団山科礼蔵氏一行並に中村巍氏、万国商事大会に出席せられたる内田嘉吉氏、第三回国際労働会議に出席せられたる星野錫氏、及汎太平洋商業会議に出席せられたる佐野善作氏・石川文吾氏・男爵東郷安氏・田中武雄氏・阿部吾市氏・服部文四郎氏等を招待し歓迎会を開催したり、出席者は正賓山科礼蔵君・土橋源蔵君・奥村安太郎君・神谷忠雄君・川口留吉君・古川大斧君・星野錫君・男爵東郷安君・田中武雄君・阿部吾市君・服部文四郎君、陪賓西野大蔵次官岡本農商務次官・芳沢外務省亜細亞局長・鶴見農商務省商務局長・田島同商事課長・

赤池警視總監・宇佐見東京府知事・河井貴族院書記官長・棚橋東京博物館長・渋沢子爵、井上・木村の日本銀行正副總裁、阪谷・中島両男爵、児玉・一宮・石塚・伊東・團・有賀・福井・浅野成瀬・高田・江口・藤原・志村・根津・木村（久寿）・添田・塩沢・松岡の諸氏其他主なる実業家、新聞通信社員、主催側本会議所議員・特別議員等総員百二名にして、正午一同食卓に着き、デザート・コースに入り藤山会頭の挨拶あり、次いで山科副会頭は南米視察の感想を述べ、服部書記長は汎太平洋商業会議の概要と今後の注意に関して演説し、阿部吾市君はハーチング大統領と会見の模様を述べ、奥村安太郎君は帰朝後の感想を述べ、次に星野錫君の謝辞あり、最後に渋沢子爵は歓迎辞と感想を述べられたり。午後二時三〇分盛會裡に散会したり。

#### 藤山会頭挨拶

閣下並に諸君、本日は過般南米実業視察団を組織されました南米を視察して御帰りになりました我東京商業会議所の副会頭山科礼蔵君御一行、並に先般布哇に開かれました汎太平洋会議に御出席になりました服部文四郎君・阿部吾市君、並に少しくなりましたけれども先年ゼノアの労働會議に御出席になりました、長い間欧米並に南洋方面迄も視察して帰られた星野錫君を主賓と致しまして、今日は歓迎の宴を催したのであります、御多用中此東京市内の有力なる皆様の御出で下さつたことは、私より深く光栄として御礼を申し上げます。

私が申上げる迄もないことでございますが、南米は今日世界の耳目の焦点となつて居ると考へます、我日本と致しましても、今日の人口過剰を調節する上に於きましても、其他の点に於きましても、南米調査と云ふことは最も大切なこと、考へて居ります、幸にも山科君は各方面の最も實際に通曉された諸君を同行されまして、あちらへ行かれまして隅なく十分の御視察をして御帰りになりましたのであります此結果は我國の実業の上之を實行する機会を得られんを私は希望するのであります、又汎太平洋會議は我々実業家の方面から見まして、最も大事な會議と考へて居りました、どうしても商業會議所は是に代表者を出さなければならぬ、故に阿部君並に服部文四郎君が全国商業會議所の代表として此会に臨まれた、又貴衆兩院からも東郷男爵並に田中武雄君が代表として御出でになつたのであります、太平洋の中心に國を立てる我國としては、此太平洋會議に於ては最も主なる地位を占めなければならぬと考へます、幸に御出になつた御方が其人を得たために、太平洋會議に於きましては主要なる地位を占めて、いろいろなことを決定されたと云ふことである、凡そ我々は國際會議に於ては、我日本は兎に角今日は三大強國の位地に上つた以上、それに相當する力を以て此會議に當らなければならぬと考へて居ります、此点に於きましては、私は汎太平洋會議に臨まれた其結果は、我國をして事実上有力なる位地にあることを認めしめるに至つたこと、信ずる、是れからは度々さう云ふ會議は起るだらうと思ひます、私は此次には我帝國内即ち東京に於て聞かれて、さうして此太平洋に面する國々、亞米利加なり、加奈陀なり、濠洲なり、其他の國々の人と相互に提携して、太平洋の平和を保ち、さうして其貿易上商業上盛んに成り立つておると云ふことの目的を達する時期の至らんことを私は希望するのであります。〔中略〕

私は此場合皆さんに御願をしたいと思ひますのは、即ち南米視察も議論に止まらずして是が實行を期せられんことを希望する、汎太平洋會議に於て決定せられた事項に付いては日本も相當責任を持たなければならぬと考へます、之は其後土産話を聞いて我々は相當の力を尽したいと考へます、ここに御來会の諸君に対

して御礼を申し上げます。

### 山科礼威演説

今日は我々のために特に盛大なる御歓待を蒙りまして、殊に唯今は藤山会頭より過分なる御言葉を賜はり、甚だ光栄に存する次第であります、私はここに南米視察団を代表して御礼を申し上げます、私は南米には大正九年に参りまして、今回は二回であります、最初参りまして此方へ帰りました当時、いろいろ南米のことに付いて御話を申し上げましたが、政府の方も耳を傾けるに至らず、民間に於ても何等も御考へもないと云ふ訳で、殆んど南米なるものは御認めにならなかつたのであります、然るに幸に今回はいろいろ皆様の御配慮に依りまして南米視察実業団を造ることになりました、今回帰朝を致して見ると、前に南米に参つて帰りました時の有様と大変な違ひがあります、政府に於かれても此南米に対しては非常に注意する気分が出来たやうに認められる、又民間に於きましても此南米と云ふものに十分に耳を御傾けになるやうな傾向がありまして各方面に相当の反響があつて昨今は何処でも此話で持ち切るやうな心持ちの致しますやうな次第であります。

唯今藤山会頭の申されましたやうに、南米に向つて我国は大いに注意しなければならぬ、今や此方面に向ひまして日本が發展致しますと云ふことに付きましては、我国家の爲めに御同慶に堪へない次第であります、併し此度帰朝致しまして、連日各方面の御招待を蒙りましていろいろ御話も致し、御意見も承つたのでございますが、其際に受けたる御質問に付いて、で申上げて見たいと思ふ、それは何かと申ますと、或る御方が一体南米と云ふ所は白昼猛獣の横行するやうなことはあるまいと云ふ質問があつた、是には私も驚いたのであります、又一つは日本の道路なるものは甚だ宜しくないが、無論之は欧米には及ばぬ話であるが南米よりは宜しいだらう、斯う云ふ御質問を受けた、此二つから考へますと、仲々南米の宣伝を今後大いに努めなければならぬと思ふのであります。道路の上から申ししても、南米に於ては実は非常に立派な道路を設けて居る、或る方面に於ける道路の如きは恰も絨氈を布いたやうな形でありまして、其立派なことは欧米に於ても見る可らざる道路である。

### 服部文四郎演説

第一に申上げたいことは、日本を出発致しまする前に、汎太平洋會議はあれは御馳走會議である、遊び半分の間だから其積りで行つたら宜からうと云ふやうな一方に御話がありました、所が一方には、此汎太平洋會議は亜米利加が自国の爲めに便利を図るべく考へて居るやうに見へるから、余程注意して貰ひたい、斯う云ふ双方氷炭相容れざるやうな御訓戒でありましたが、實際行つて見ました所に依りますと、此會議には実利実益に関することが多いのでございます、何分各国の利害問題に関することが多い爲めに、各国共相當注意を払つて居る、其議事の結果と致しまして、来年の七月天産資源に関する會議を開くことになりました、之は御承知の通り日本と亜米利加其他と結びました漁業の条約の期限が切れる、夫れに関する下準備と見て差支へないのであります、それから又太平洋會議に於ては仲々議論も盛んであり、亜米利加では何でも自分に都合の宜いやうな提議をして居りました、又種々考案を提出すると云ふやうな訳で、是等のことが矢張り

其時の問題になります、そこで他の会議のことは存じませぬが、経済の利害に關係する此會議には特に御注意を願ひたい、日本が今後此會に出席しない出席しないと自國に取つて面白からざる決議でもされたら、却つて不利益の地位に陥りはしないかと云ふことを痛切に感じました、為めに夫れだけを申上げて置きます、今後はどうか十分に御注意を願ひたいと思ひます、本日は有難く御礼を申し上げます。

#### 阿部吾市演説

私は汎太平洋會議に列しまして、夫れから米大陸へ参りまして、石炭・石油其他一般の産業並に經濟の事情を調査したい、それには成る可く亜米利加の偉い人に遇つて見たい、斯う云ふ趣意で、大統領に遇うことが予定の一つでありました、そこで洪沢子爵にどうか成る可く偉い經濟界の中心人物とも云ふ人に紹介して頂きたいと言つて願つて有名なジャツヂ・ゲリー氏に紹介して頂いたのであります、所が洪沢子爵は、紹介状に私のことを大變によく紹介して下さいたので、先方でも愉快に話をして呉れました、お前は何しに来た、私は石炭屋の子爵ですが、亜米利加の石炭・石油を見に参りました、さうか、然らば日本では石炭はどの位出るかとやられた、日本では二千五百万噸出ます、さうか、俺の鋼鉄会社の關係だけでも三千五百万噸出る、鉄は幾ら出来る、百万噸出ます、それは亜米利加では俺のやつてるだけでも二千五百万噸は出る、云ふやうな話を聞かされてびっくりした、併しびっくりしてはならぬ、洪沢子爵にもしつかりしなければ駄目だと言はれて居りましたので、こんなことでびっくりしては往けないと思ひまして、あなたの御關係の会社のことは私も聞いて居ります、此頃は余り鉄は宜くないではありませんか、それは近頃は宜くない、一時

は宜かつた、其利益を積立つて五億弗ある、資本金は一億弗、鉄は二千五百万噸出す、さうして将来を始終見て居る、さう云ふことを段々話をして居る内に、一人人間は第一に自己の子孫の為めに務めなければならぬ、第二に社会公益の為めに尽さんければならぬ、第三には世界人類の為め、世界平和の為めに一身を捧げなければならぬ、尤で洪沢子爵の論語のやうなことを言はれた、之には私も驚いた、イヤ夫れは私の方の洪沢子爵も其通りで、尚ほ進んで日米親善の為めに努力して居る、あなたも日米親善の為めに努力すると言はりたい、イヤ夫れは俺もやつて居る、斯う云ふやうな話をして有名な炭鉱の紹介やら、各方面の知名の人々に手紙を呉れました。

それから私が大統領を尋ねたのは十二月の九日で、是非御目に掛りたいと云ふことを國務卿に就いて申入れました、所が議會が開會中で船舶法案だの、農業法案だの、いろいろな問題で非常に忙しい時であるから、如何かと思ひましたが、幸に遇ほうと云ふことで、快よく大統領の部屋へ通されました、御遇ひになつた御方は御承知でありませう、非常に大きな人である、非常な温顔を以て私を迎へて、私の小さい手をウムと握つた、そこで左様ならんといつて帰るやうではいけないと思つて、洪沢子爵は始終日米親善と云ふことを言はれて居るから、果して亜米利加の大統領なるハーディング閣下は日米親善に付いてどう云ふ考を有つて居るか、それを聞かうと思ひました、それからウムと手を握つて私は斯う云ふやうに申しました、私は日本で商業會議所の議員であります、さうして実業聯合會の副会長をして居る、其代表である、今度汎太平洋會議へ出席致しまして、それから此米大陸へ参りまして、世界的の偉大なる産業の状態を拜見致しました、合せて世界の偉人たる閣下に拜謁したいと思つて参つたと言ふと、大統領は笑を含んで、まあ腰を掛ける、斯う言はれたからもう占めたとと思つて腰を掛けた、それから日米親善に付いて話をして、洪沢子爵にも宜しく伝へて呉

れ、自分も日米親善に付いては深く望んで居ると言はれた、そこで私は閣下と遇つたと云ふこと日本へ帰つて仮りに歓迎会でもある場合には人々に申したい、大統領と握手した、斯う云ふ話をしたと言つても、何、阿部が法螺を吹くかと仰しやるに違ひない、渋沢子爵なら何もあなたの写真を貰つて行く必要はないが、私はさうはいかぬ、どうか閣下の写真に私と話をしたと云ふことを書いて戴きたいとやつた、すると大統領はどう思つたか宜しいと言つてペンを取つてスラスラと写真へ書いて、夫れを私に呉れた、それは此所に持つて居ります。此写真に対して大統領は自からペンを取つて「余は衷心より日米兩國間の永久的友誼と親善を望む」と認めて私に呉れた、ここで私は御別れをして帰りました。

### 星野錫演説

私は一昨年ゼノアの労働会議へ参りまして暫くあちらに居つたのでございます、私の参りましたのは第三回の労働会議でありまして、今日其状況を申上げることが必要とは思ひますが、併し昨年十月に第四回の労働会議があつて夫れに出た方々も既に御帰りになつて居る位ですから、今日私其御話をするのは丁度証文の出し後れのやうなものであります、もう皆様は御聞きになつて御承知のこと、思ひます、それでもう其証文は済んで居る。

私があちらに居りますと、山科君から南米へ来ないかと云ふ電報で御誘ひを受けましたので、私も南米へ参つたのであります、併し此の南米の話も唯今ございましたから私から申上げる必要はありません、唯私が申上げて御参考に供したいのは矢張り労働会議のことでありまして、此国際労働会議と云ふものが催されたこと云ふことは極めて私は宜い事であると思ふ、どうか私は此会議のことは成る可く長く維持したいと考へた、此事に付いて申上げると長くなりますから今は夫れ丈けのことを申上げる、第四回の会議の時に日本へ国際労働会議の出張所を置くと云ふ決議になつたやうであります、恐らくは其内に出来るだらうと思ひますが、兎に角此労働会議へ各国から出た人は何れも立派な人ばかりであります、実に立派な議論をして居る、實に此会議は必要な会議だと申上げて差支ないと思ふ、尚ほいろいろ申上げたいこともありませうけれども、今申す通り証文の出し後れなやうなものですから是れ丈けで止めます。

### 渋沢子爵演説

閣下並に各位、本日は最近帰朝されましたる南米視察実業団山科礼蔵君の御一行、同じく汎太平洋商業会議に出席し、更に米國をも視察して帰朝せられたる服部文四郎君並に阿部吾市君、又ゼノアの労働会議に出席せられ、其後各国を視察して帰朝せられたる星野錫君の歓迎会を催され、一堂に相会して諸君の着眼点が非常に進歩したることを最も喜ばしく思ふでございます。従前私共の海外視察に参りましたる頃は、山水の美を賞し、名勝旧蹟を探ると云ふやうな事柄が多かつたのであります。山の姿が秀麗であるとか、海の色が美しいと云ふやうな事柄が多く眼についたのであります。従つて其當時にありましては、海外視察の帰朝談なるものは、海外の山水風光の美を語ると云ふのが普通でございました。

然るに只今諸君の御話を承りますと、風景を論ずると云ふやうな事柄はなく、海外諸國の經濟状態或ひは社会状態と我國の其れとを比較せられ、或は彼我産業上の差異を明かにせられ、而して其結論として更に斯

く斯くの施設を必要とする、或ひは斯く斯くの方策を採らねばならぬとやうの実行論にまで進んで居られるのであります。私が御話を拝聴いたしましたして、往時を顧み、其進歩の著しいのに深く感歎した次第であります。

ついでには、諸君が詳細に視察研究せられ、其結果到達せられたる御意見は、成る可く之れを実際の施設の上に現はすやうに努力いたしたいと考へます。政府当局におかれましても、諸君の御報告は十分尊重せられることでありませうし、又民間に於ても之れを実現することに協力いたしたいと考へます。諸君の御話を承りまして、敬服の余り、一言懐旧の所感を申述べ、歓迎の言葉に代へた次第であります。①

大日本製糖の社主にして藤山コンチエルの総帥である藤山雷太は、一九二三年四月より東京商業会議所会頭として欧米を視察し、サンフランシスコ近郊で排日家の巨頭フィラン、ニューヨークで実業家大立者ヴァンダーリップ、ワシントンでハーディング大統領を訪問した。② 大震災の急報に接したのは帰途樺名丸の船上である。

#### 藤山雷太「震災の報至る」(『熱海閑談録』)

欧米旅行も予定の如く終り、穏かな夢を乗せて帰朝航海中、大正十二年九月一日の大地震の報に接した。

① 『東京商業会議所報』第六卷第三号(大正十二年三月)、六一七頁。

② 藤山雷太著『熱海閑談録』中央公論社、一九三八年。二〇〇―二二〇頁。

八月二十六日マルセーユから郵船樺名丸に乗り、駐独大使日置益氏、代議士安藤正純氏、子爵松平乗統氏、三菱の山室宗文氏などとともに航海穩かにポートセットに入港した。其日貴族院議員に勅選の電報が届き、九月一日には山本権兵衛伯が内閣を組織したとの報があった。最初に震災の報を得たのは、九月五日アデン湾に入った頃で、出所は分らないが、「一日正午大地震、沼津、横浜全滅。東京死傷多数。宮殿砲兵工廠火災起る」とあって非常に驚いた。ところが午後四時頃ナウエン無線電信局の新聞電報では「日本の震災は激甚で、死傷損害は知るべからず、ただに東京横浜のみならず、大阪仙台間の各地に非常の損害あり。電信電話不通、詳細不明、各噴火山も活動す」とあって、船中の騒動はひと通りでない。翌六日モンスーン南方より来り、風浪高く、不安の間に一日を送り、七日午前九時、去る二日コロンボを出帆した箱根丸から入電があった。

「東京地震のため多数の家屋破壊し、火災起る。水道及鉄道破壊さる。松方公、其他死傷多数、宮城に火災起りたるも、皇太子殿下御無事。浅草十二階倒れ、死傷七百余名。横浜も火災起り市民は港内停泊汽船に避難」

そして日を重ねる毎に、悲惨の度を増し、九月八日コロンボ無電圏内に入り、大日本製糖会社、商業会議所、白金宅、伊吹邸に打電したけれども、返事はない。船中では外人客は競技の商品を競売贖金して東京震災の見舞いとして総委員長サー・ジョン・ランレス氏から日置大使と私とに対して贈られた。九月十日に至って、始めて大日本製糖大里工場長金行二郎君から詳報が来たのが正確な第一報で、それから順次家族安全なことも分ったが、船規を冒しても此際致方がない、樺名丸の速力を早めるやう私が責任を以て船長を説き、ハイスピードでコロンボ迄駆け付けたのであった。

それから後も船足を早めて九月三十日漸く神戸入港、東海道線不通とあつて十月二日上海丸で神戸を出て十月三日横浜に着いた。その日空は晴れて、駿豆房総の諸山はもとの通り綺麗に見ゆるが、横浜港の防波堤は水中に没し、岸壁は崩壊し、市街は全滅している。その惨憺たる光景を平沼亮三君が案内して呉れ、其変り果てた姿に驚いた次第である。それから東京に帰り、徳川家達公を会長とし、貴衆両院及び主なる実業家で組織せる震災善後会に加はり、救済と復興の為寄付金募集其他に大に働いたやうな訳であつた。①

なお、九日貴衆両院と実業家の協議会で要望された皇族の総裁奉戴について、皇室は慎重であつた模様である。宮内省との折衝に赴いた書記官長河井弥八から洪沢に届いた報告をここに付す。

#### 河井弥八「九月一〇日付洪沢栄一宛書簡」

拝啓、連日厚き御尽瘁を賜り深謝之至に奉存候。昨日徳川公爵には宮内大臣を御訪問相成、大震災救護会の総裁として皇族殿下奉戴の義願上候処、宮内大臣の申さる、所に依れば、過日小生より御内意相伺候節は、震災の救護のみを目的とする会として奉戴支障なしと決定相成候得共、昨日御決定之如き目的のものと相成候上ハ猶考慮を要するを以て、会の趣意書熟読、十分評議を尽し候上にて返答可致とのことに御座候。依て小生は公爵の命を奉し今朝宮内次官を訪問し、規約書を示して会の成立の次第及目的事業を詳説仕り、奉戴

① 同書。二四〇―二四二頁。

の目的を相達し候様依頼仕候、次官には十分考慮し至急決定可致旨被申候、何れ正午頃にハ何分の回答に接すべく候得共、不取敢右御報知申上候。勿々頓首

九月十日

貴族院事務局二而

河井弥八

洪沢子爵閣下

侍曹 ①